
バラク・オバマのアリゾナ州トゥーソンにおける追悼演説をめぐる考察

花木 亨

要 旨

2011年1月8日、アリゾナ州トゥーソンのショッピングセンターで開催されていた政治集会で、民主党所属のアメリカ合衆国議会下院議員ガブリエル・ギフォーズたちが銃撃された。この銃撃によって、アリゾナ地区連邦地方裁判所判事と9歳の少女を含む6人が命を落とし、ギフォーズを含む13人が負傷した。現職のアメリカ合衆国議会議員を標的としたこの銃撃は、アメリカ合衆国の政治家と市民たちに衝撃を与えた。彼らの多くは、犯行の残虐さを非難すると同時に、被害者たちに対する共感を示した。別の者たちは、この凶悪な事件の背景には過激化する保守派とリベラル派の間の政治的対立があると指摘した。1月12日、大統領バラク・オバマはアリゾナ州トゥーソンにおいて開催されたこの銃撃事件の追悼式典に出席し、演説を行った。本稿では、この演説をコミュニケーション研究の観点から分析する。

1. アリゾナ州トゥーソン銃乱射事件

2011年1月8日土曜日の午前、アリゾナ州トゥーソンのショッピングセンターで民主党所属のアメリカ合衆国議会下院議員ガブリエル・ギフォーズ（Gabrielle Giffords）の政治集会が開催された。この政治集会の最中、男が銃を乱射し、6人が死亡、ギフォーズを含む13人が負傷した。死者には

アリゾナ地区連邦地方裁判所判事ジョン・M・ロール (John M. Roll) や9歳の少女クリスティーナ・テイラー・グリーン (Christina Taylor Green) などが含まれていた。犯人は半自動式拳銃でギフォーズの頭を至近距離から撃ち抜くと同時に、他の参加者たちに向けて銃を乱射した。そして、弾倉を交換しようとした際、現場に居合わせた人々によって取り押さえられた。ギフォーズを含む負傷者たちは直ちに病院へと搬送された。現職のアメリカ合衆国議会議員を標的とした銃撃事件は、1978年に民主党の下院議員が滞在先の南米で殺害されて以来、初めてのことだった。「Congress on Your Corner」と名付けられたこの小規模な政治集会は、民主党議員と地元の有権者たちとの交流を促進することを目的とした催しで、ギフォーズが下院議員三期目に入ってから初めての試みだった (Lacey & Herszenhorn, 2011, January 8; Murray & Horwitz, 2011, January 9)。

アリゾナ州トゥーソン生まれで当時40歳のギフォーズは、アリゾナ州議会議員を務めた後、2006年にアメリカ合衆国議会下院議員に初当選した。2010年11月の中間選挙では、ティーパーティーの支持を受けた共和党候補を僅差で破り、三選を果たした。ギフォーズは銃規制に反対したり、国境管理の厳格化に賛成したりするなど、民主党中道派として知られる。その一方で、彼女はオバマ政権の医療保険制度改革法案に賛成し、アリゾナ州で可決された不法移民取締法に反対していたことなどから、保守派の標的になることが多く、度々嫌がらせを受けていた。2010年3月に医療保険制度改革法案に賛成票を投じた際には、彼女の事務所が襲撃され、ガラスが粉碎された。こうした経緯や容疑者の自宅から見つかった証拠などから、今回の犯行も政治的動機によるものではないかという憶測が飛び交ったが、容疑者が黙秘権を行使したため、真相は明らかにされていない。ただし、ギフォーズが今回の銃撃の標的だったことは間違いないとされている。銃撃を受けたギフォーズは、そばにいた研修生のダニエル・ヘルナンデス・ジュニア (Daniel Hernández, Jr.) の応急処置によって一命を取り留めた後、アリゾナ大学メディ

カル・センターに搬送され、集中治療を受けた（Lacey & Herszenhorn, 2011, January 8; Murray & Horwitz, 2011, January 9）。

この事件は全米の注目を集め、多くの反響を呼んだ。共和党所属で下院議長に就任したばかりのジョン・ベイナー（John Boehner）は、「私たちの社会において、公人に対する暴力や脅迫が存在する余地はない」として、議員に対する暴力を非難した（Lacey & Herszenhorn, 2011, January 8）。このベイナーの発言は、今回の銃撃をアメリカ合衆国の民主主義に対する挑戦だと受け止める一連の意見を代表している。同じく共和党所属でアリゾナ州選出上院議員のジョン・マケイン（John McCain）は、「誰が犯人だとしても、何が彼らの動機だとしても、彼らはアリゾナにとって、この国にとって、そして人類にとっての恥だ。彼らはすべての良識ある人々の軽蔑と法による最強の刑罰に値するし、実際にそれらを受けるだろう」と述べ、より一般的な見地から今回の犯行を強く非難した（Police ‘actively pursuing’ second person, 2011, January 9）。これらの発言が共和党所属の政治家たちによってなされたことから、この事件が党派の違いを越えた非難と被害者たちに対する共感を呼び起こしたことがわかる。大統領バラク・オバマ（Barack Obama）も事件の被害者たちに対する共感の言葉を述べ、真相解明に全力を尽くすことを約束すると同時に、一人の友人としてギフォーズの快復を願った。この事件を受けて、共和党が多数を占めるアメリカ合衆国議会下院はすべての法案審議を延期した（Lacey & Herszenhorn, 2011, January 8; Murray & Horwitz, 2011, January 9）。

この銃撃事件が発生した背景として、医療保険制度改革や移民制度改革などをめぐって過激化する保守派とリベラル派の間の政治的対立を指摘する者たちがいた。トゥーソンを管轄するピマ郡の保安官クラレンス・W・デュブニク（Clarence W. Dupnik）は、「この国を覆っている怒り、憎しみ、頑迷さは常軌を逸している。そして、残念なことにアリゾナはその中心地になってしまった」と述べ、対立と憎悪の度を増すアメリカ合衆国の政治風土、そしてその象徴としてのアリゾナ州における不法移民取締法をめぐる騒動を嘆い

た (Murray & Horwitz, 2011, January 9)。

リベラル派の中には、サラ・ペイリン (Sarah Palin) らの保守系政治家たちが駆使してきた過激なレトリックを批判する者たちもいた。ペイリンは医療保険制度改革法案が可決された際、短文投稿サイトのツイッターに「撤退するな、弾を込めなおせ (Don't Retreat, Instead — RELOAD)」と投稿し、物議を醸していた。また、2010 年中間選挙の際には、ギフォーズら 20 人の民主党議員たちを落選させるべき候補と定め、これらの議員たちの選挙区の上に銃の標的を示す十字線を重ね合わせた地図を自分のウェブサイト上で公開したことから、批判を浴びていた (Balz, 2011, January 10)。リベラル派はこうした過激なレトリックが政治的な憎悪と対立を助長し、今回のような事件が発生し得る土壌が形成されたと批判した。しかし、実際にはペイリンの言動が今回の犯行の直接の原因となったという証拠はない。いずれにせよ、こうした一連の発言から、今回の銃撃事件がアメリカ合衆国において深刻化する政治的分断に対する注意と反省を人々に促したということが確認できる (Lacey & Herszenhorn, 2011, January 8; Murray & Horwitz, 2011, January 9)。

悲しみ、驚き、怒り、不安、不信、動揺、困惑など、様々な感情がアメリカ全土を覆う中、2011 年 1 月 12 日水曜日、アリゾナ州トゥーソンにおいて、今回の銃撃事件の追悼式典が開催された。大統領バラク・オバマはこれに出席し、演説を行った。この演説において、オバマはいくつかの課題に直面した。まず、オバマは事件の被害者たちの死を悼み、遺族たちの悲しみを和らげなければならなかった。また、平穏な郊外で発生した凶悪犯罪に対するアメリカ市民たちの不安を取り除き、アメリカ合衆国という共同体に対する彼らの信頼を取り戻さなければならなかった。さらに、オバマはアメリカ人たちに結束を促し、自由と民主主義の徹底という理想の実現に向けて彼らを導かなくてはならなかった。オバマはこれらの課題にどのように立ち向かったのだろうか。本稿では、追悼式典におけるオバマの演説をコミュニケーション研究の観点から吟味することで、この問いに対する一つの応答を試みる。

2. 先行研究

オバマの演説は多くのコミュニケーション研究者たちの関心を集めてきた。たとえば、演説家としてのオバマの原点を成す 2004 年民主党全国大会基調演説 (Frank & McPhail, 2005; Rowland & Jones, 2007), ジェレマイア・ライト牧師の説教をめぐる騒動を受けて 2008 年大統領選中に行われた「ア・モア・パーフェクト・ユニオン (A More Perfect Union)」演説 (Frank, 2009; Rowland & Jones, 2011; Terrill, 2009), 2008 年大統領選における演説全般 (花木, 2015), 2009 年大統領就任演説 (Frank, 2011), そして 2009 年の医療保険制度改革についての演説 (Rowland, 2011) などがコミュニケーション研究の見地から分析されてきた。

これらの研究はオバマの演説に見られるいくつかの特徴を明らかにしている。たとえば、ロウランドとジョーンズの研究は、2004 年民主党全国大会基調演説と「ア・モア・パーフェクト・ユニオン」演説において、オバマが普遍的なアメリカン・ドリームの世界を語ることで、多様なアメリカ人たちを一つに束ねようとしていると指摘する (Rowland & Jones, 2007, 2011)。ロウランドとジョーンズによれば、アメリカン・ドリームとは普通の人々 (ordinary people) が勤勉と弛まぬ努力とによって偉業 (extraordinary things) を成し遂げる物語である (Rowland & Jones, 2007, p. 430)。そこでは、市民の小さな行動の積み重ねがよりよい社会の形成へとつながっていくことが示唆されている。この進歩の神話には、個人と社会という二つの側面が含まれている。その個人的側面においては、自らの手で自らの未来を切り拓く普通の人々の偉業が称えられる一方で、成功者とそれ以外の人々は二分される。その社会的側面においては、助け合いの精神や社会的公正への関心が強調され、それらがアメリカ合衆国という共同体に一体感を与える。オバマは演説の中で、これらの二つの側面をともに受け入れつつ、保守とリベラルという政治的二項対立を越えた普遍的なアメリカン・ドリームの物語を語り、幅広い聴衆の

支持を獲得した。これがロウランドとジョーンズの主張である（Rowland & Jones, 2007, 2011）。

オバマの演説が文化的差異を越えて多様な聴衆を魅了する力を備えていることは、他のコミュニケーション研究者たちも指摘している。たとえば、フランクは2004年民主党全国大会基調演説におけるオバマの語りを「統合のレトリック（rhetoric of consilience）」と呼んで評価する（Frank & McPhail, 2005）。フランクによれば、多文化的な生い立ちを持つオバマは、黒人たちの被差別体験を軽視することなく、黒人以外の人々の悲痛な体験について語ることができた。そして、その語りをとおして、黒人と白人を含むすべてのアメリカ人たちを自由と平等のより完全な実現という普遍的目標に向けて動員することができた。同様に、テリルは「ア・モア・パーフェクト・ユニオン」演説におけるオバマが、黒人の視点と白人の視点をともに尊重しつつ、二重性を抱えた統一という新たな視座をアメリカ人たちに提供していると指摘する（Terrill, 2009）。テリルによれば、この立体的かつ多元的な視座は、アメリカ合衆国における政治的言説を硬直から解き放ち、より柔軟な民主主義を可能にする。

オバマの演説に焦点を絞ったこれらの研究に加えて、大統領の演説（presidential rhetoric）一般に関する研究も本稿にとって貴重な示唆を与えてくれる。たとえば、キャンベルとジェイミソンの研究によれば、今回の追悼式典におけるオバマの演説は「国民的ユーロギー（national eulogy）」の一種だと考えられる（Campbell & Jamieson, 2008, pp. 73-103）¹⁾。国民的ユーロギーとは市民社会を揺るがす出来事が発生した際、その意味をめぐって大統領が行う演説である。アメリカ合衆国大統領は、この演説をとおして、死者たちを悼み、彼らの偉業を称えると同時に、残された者たちの心の傷を癒し、彼らを一つの国民として結束させようとする。この演説において、死者たちはアメリカ人であることの最良の部分を体現する者たちとして描き出される。彼らは大統領の語りをとおして、身体的存在から精神的存在へと変換され、

残された者たちの記憶の中で生き続ける。そして、アメリカ合衆国という共同体の強靱さが取り戻される。

今回のオバマの追悼演説に彼の他の演説と同様の特徴を確認することができるだろうか。また、この演説は国民的ユーロギーに期待された役割をどのように果たしているだろうか。

3. 演説の内容

銃撃事件の4日後にあたる2011年1月12日水曜日の夕方、アリゾナ州トゥーソンで開催された追悼式典において、オバマは約34分の演説を行った。会場のアリゾナ大学マッケイル・メモリアル・センター（McKale Memorial Center）は、1万4000人の聴衆で一杯になった。聴衆には、事件の遺族やアリゾナ大学の学生たちに加えて、法曹関係者や政治家たちが含まれていた。大統領夫人ミシェル・オバマ（Michelle Obama）は、大統領オバマとともに事件の遺族や被害者たちと面会した後、会場でガブリエル・ギフォーズの夫マーク・ケリーの隣に座り、オバマの演説を聴いた。演説はテレビ中継され、全米各地で多くのアメリカ人たちがこれを視聴した（Cooper & Zeleny, 2011, January 12）。この演説において、オバマは何を語ったのだろうか。以下では、まずこの演説の内容を確認する。この節における記述には、オバマの演説からの引用とその翻訳に加えて、筆者の解釈が含まれている。

3-1. 哀悼と民主主義

オバマはまず、演説会場に足を運んだ被害者の家族と友人たち、アリゾナ大学の学生たち、公職者たち、そしてその他のすべての聴衆に対して、彼らとともに祈り、嘆き、歩み続けることを約束する。その上で、旧約聖書の詩篇から以下の一節を引用する。

There is a river whose streams make glad the city of God,
the holy place where the Most High dwells.
God is within her, she will not fall;
God will help her at break of day.
(Obama, 2011, January 12)

追悼演説の主要な目的の一つは、死者たちを悼み、遺族たちの心の痛みを和らげることである。そのため、大統領には聖職者のような役割を果たすことが期待されている (Campbell & Jamieson, 2008, pp. 73-103)。上の聖書からの引用には、この期待に応えようとするオバマの姿勢が反映されている。神に守られた都は揺るがないという言葉は、神の庇護を受けたアメリカ合衆国には今回の銃撃事件を乗り越えることができるということを示唆している。

こうして演説の基調を設定した後、オバマは事件の経緯を説明していく。オバマは、事件当日、ガブリエル・ギフォーズらがスーパーマーケットの外に集まり、「平穏な集会と自由な言論の権利 (right to peaceful assembly and free speech)」を行使していたと述べる (Obama, 2011, January 12)。オバマにとって、ギフォーズらの集会は建国の父たちが思い描いた民主主義の理念の実践であり、リンカーンがゲティスバーグにおいて語った「人民の人民による人民のための政治 (government of and by and for the people)」の現代版だった (Obama, 2011, January 12)。その極めてアメリカ的で民主的な営みが凶弾によって破壊されたという事実を強調することで、オバマは今回の銃撃事件がアメリカ合衆国の民主主義に対する挑戦であるということを明確にする。

この点に関して、1791年に成立したアメリカ合衆国憲法修正第一条に以下の記述がある。

Congress shall make no law respecting an establishment of religion, or prohibiting the free exercise thereof; or abridging the freedom of speech, or of the press; or the right of the

people peaceably to assemble, and to petition the Government for a redress of grievances.
(The First Amendment to the United States Constitution, 1791)

銃撃事件発生の2日前にあたる2011年1月6日木曜日、アメリカ合衆国議会下院において議員たちが共同で憲法を読み上げた。ガブリエル・ギフォーズはこれに参加し、上述のアメリカ合衆国憲法修正第一条を読み上げた (Ball, 2011, January 8; Lacey & Herszenhorn, 2011, January 8)。この事実を踏まえると、今回の銃撃事件をアメリカ合衆国の民主主義に対する挑戦と見なすオバマの発言の重みが際立ってくる。

このようにオバマは、死者たちを哀悼することとアメリカ合衆国の民主主義を擁護することという二つの主題を演説の冒頭で明らかにする。

3-2. 死者たち

続いてオバマは、銃撃によって命を落とした6人のアメリカ人たちに具体的に言及する。凶弾に倒れたこれらの死者たちはアメリカ人であることの最良の部分を体現しているとオバマは述べる。そして、オバマはこれらの死者たち一人一人の人物像を描き出していく。それは遺族たちとの会話の中からオバマが紡ぎ出した6人の肖像である。以下では、オバマの言葉を筆者なりに翻訳しつつ、その内容を確認する。

ジョン・ロールは、演説会場であるアリゾナ大学の法科大学院を修了した後、40年近く司法界で活躍した。20年前、ジョン・マケインによって連邦裁判所判事に推薦され、ジョージ・H・W・ブッシュ (George H. W. Bush) 大統領によってこれに任命された。同僚の誰もが認める勤勉な判事であったロールは、いつも通りミサに参加した後、ギフォーズに挨拶をしようと彼女の集会に立ち寄った。彼の死後には、妻と3人の息子たち、それに5人の美しい孫たちが残された。

ドロシー・モリス (Dorothy Morris) と夫のジョージ (George) は、高校

時代からの恋人同士で、二人の娘に恵まれていた。RV（居住空間付きの大型娛樂車両）で旅行するなど、二人はいつでも一緒だった。土曜日の午前、二人はギフォーズの話を聞きにスーパーマーケットへと出かけた。銃声が響いたとき、元海兵隊員のジョージは直観的に妻を守ろうとした。二人ともが撃たれ、ドロシーが命を落とした。

ニュージャージー州出身のフィリス・シュネック（Phyllis Schneck）は、定年退職後、雪を避けるためトゥーソンへと移り住んだ。夏の間、彼女は東部へと戻り、3人の子どもたち、7人の孫たち、そして2歳の曾孫とともに時を過ごした。シュネックはキルト作りの名人で、よくお気に入りの木の下で作業していた。ジェットとジャイアンツのロゴを縫い込んだエプロンを作って、教会で配布することもあった。シュネックは共和党支持者だったが、ギフォーズのことを気に入り、彼女の政治集会に足を運んだ。

ドーワン・ストッダード（Dorwan Stoddard）とその妻メイヴィー（Mavy）は、約70年前、トゥーソンで育った。のちに彼らは離れ離れになり、それぞれの家庭を築いた。それぞれの配偶者に先立たれた彼らは、トゥーソンに戻り、再び一緒になった。二人はRVで旅行を楽しみ、教会で困っている人たちを助けた。建設作業員だったドーワンは、空き時間には愛犬とともに教会を補修した。銃撃の際、彼は身を挺して妻を守った。

ゲイブ・ジーマーマン（Gabe Zimmerman）は、他人を助けることに情熱を注いでいた。ガブリエル・ギフォーズの地域奉仕活動を統括し、高齢者たちがメディケアの恩恵を受けられるように、退役軍人たちが勲章と手当てを受けられるように、そして政府が普通の人々のために動くように尽力した。彼は自分が一番好きなことをしている最中に銃撃された。それは人々の話を聞き、どうしたら彼らを助けることができるのかを考えるということだった。彼の死後には、両親と兄弟、そして翌年に結婚する予定だった婚約者が残された。

最後の一人は、9歳のクリスティーナ・テイラー・グリーンである。彼女

は優等生であり、ダンスと体操と水泳に秀でていた。所属するリトルリーグのチームで唯一の女性だった彼女は、自分がメジャーリーグ初の女性選手になると心に決めていた。彼女は自分たちの人生がいかに恵まれているかを母親に説き、自分より恵まれない子どもたちのための慈善活動に参加していた。

このように、オバマは6人の死者たちの肖像を生き生きと具体的に描き出す。このオバマの言葉をとおして、家族と友人たちは死者たちの生前の姿を思い出し、それ以外の聴衆は死者たちの人物像の一端に触れることができる。そして、死者たちの人生の記憶と彼らの死の重さが聴衆に共有される。ここでオバマは、死者たちの人生を称えると同時に彼らの死を悼むというユーロギーに期待された役割を果たそうとしている（Campbell & Jamieson, 2008, pp. 73-103）。

3-3. 生存者たち

銃撃によって命を失った人々について語ったオバマは、続いて銃撃を生き延びた人々について語り、そこに希望を見出そうとする。まずオバマは、今回の銃撃の標的とされたガブリエル・ギフォーズについて言及する。ギフォーズは演説の最中、会場から近いアリゾナ大学メディカル・センターで集中治療を受けており、オバマは演説前にそこを訪れていた。オバマが病室を出た直後、数名の議員たちに囲まれながら、ギフォーズは事件後初めて目を開けた。オバマはギフォーズの夫であるマーク・ケリーの承諾を得た上で、この最新情報を演説の中で披露する。聴衆の大きな拍手に包まれながら、オバマは「ギャビーが目を開けた（Gabby opened her eyes.）」と4度繰り返す（Obama, 2011, January 12）。このオバマの発言は、ギフォーズ殺害という犯行の目的が失敗に終わったことを示唆している。

こうして悲劇の中に希望を見出したオバマは、他の生存者たちの英雄的行為を紹介していく。ギフォーズの研修生だったダニエル・ヘルナンデス・ジュニアは、目の前で銃撃されたギフォーズに応急救置を施し、彼女の命を救っ

た。犯人が弾倉を取り換えようとしたとき、現場に居合わせた男たちは彼を取り押さえた。パトリシア・メイシュ（Patricia Maisch）は、犯人の弾倉を奪い取り、さらに奪われたかもしれない命を救った。そして、現場にかけつけた医者と看護師と緊急救助隊員たちは、負傷者たちの傷を癒した。

オバマによれば、これらの生存者たちは、英雄的行為が戦場においてのみ見出されるものではなく、またそれは特別な訓練や身体能力を必要とするものでもないということを聴衆に思い出させる。英雄的行為は多くのアメリカ人たちの心の中に秘められている。このオバマの言葉は、普通の人々が偉業を成すというアメリカン・ドリームの話と重なり合う（Rowland & Jones, 2007, 2011 参照）。オバマによれば、銃撃事件の生存者たちの英雄的行為は、いくつかの問いをアメリカ人たちに投げかけている。それは、彼らが先へ進むためには何が必要なのか、どうすれば死者たちを称えることができるのか、そして、どうすれば死者たちの記憶に対して誠実でいられるのかといった問いである（Obama, 2011, January 12）。

3-4. 共感と連帯

オバマは今回の事件が全米で多様な議論を引き起こしていることを確認する。銃撃の動機について、銃規制の効果について、あるいは精神衛生上の問題への対応について、全国的な議論が活発化している。オバマはこれらの議論の必要性を認めつつも、その方法について聴衆に注意を促す。今回の銃乱射事件の原因をアメリカ合衆国において深刻化する政治的分断に求める議論があることは先に述べた。そのような状況においては、問題の原因を自分とは違う考え方をする者たちに求め、彼らを批判するということが起こり得る。オバマはこれを戒め、「傷つけるのではなく、癒すようなやり方で話し合うこと（talking with each other in a way that heals, not wounds）」を聴衆に促している（Obama, 2011, January 12）。

オバマは旧約聖書のヨブ記から「光を待っていたのに、暗闇が来た（When

I looked for light, then came darkness.）」という言葉引用しつつ、時に人知を超えて悲惨な出来事が起こり得るということを聴衆に思い出させる（Obama, 2011, January 12）。どうすれば今回の銃撃を防ぐことができたのか、あるいは犯人の脳裏にどのような考えが浮かんだのかを確実に知ることは誰にもできない。真相の解明には長い時間と慎重な調査が必要になる。オバマはこのように述べ、結論を急ぐあまり、今回の事件をアメリカ合衆国のさらなる政治的分断の契機とすることのないよう聴衆に呼びかける。そして、謙虚さと共感をもって互いの言葉に耳を傾け合い、共通の希望と夢に目を向けることを提案する。

突然の死に直面したとき、人間は身の回りの人たちとの関係について考える機会を得るとオバマは言う。また、そのようなとき、人間は自分たちにとって死が避けられないものであるということを実感する。そして、限られた人生において大切なことが、富や地位や権力や名声ではなく、「どれだけ愛したか、そして他人の人生をよくするために自分は何をしたか（how well we have loved — and what small part we have played in making the lives of other people better）」であることを思い出す（Obama, 2011, January 12）。オバマはこのように述べ、今回の銃撃事件はアメリカ人たちの分断を招くものではなく、彼らの共感と連帯を促すものでなくてはならないと強調する。

3-5. アメリカ合衆国に対する信頼の回復

オバマは事件の被害者たちを「アメリカの家族（American family）」の一員として語り始める（Obama, 2011, January 12）。オバマによれば、これらの被害者たちはアメリカ人たちに共通する資質を体現している。ジョージ・モリスとドロシー・モリスの中に、あるいはドワン・ストッダードとメイヴィー・ストッダードの中に、聴衆は夫や妻などのパートナーに対して誰もが抱く揺るぎない愛を感じ取る。フィリス・シュネックは聴衆の母親あるいは祖母であり、ゲイブ・ジーマーマンは彼らの兄弟あるいは息子である。ジョン・ロー

ル判事は、家族を大切にすること、仕事をうまく成し遂げること、そして法を重んじることの大切さを象徴する。公共精神に富んだガブリエル・ギフォーズは、「より完璧な連邦（a more perfect union）」を実現するための険しくとも不可欠な作業に参加しようとする意志を体現する（Obama, 2011, January 12）²⁾。そして、クリスティーナ・テイラー・グリーンは、すべての聴衆の子どもである。彼女は好奇心が強く、疑うことを知らず、快活で、魅力にあふれている。人々の愛情を受けるにふさわしく、よい見本によって導かれるのにふさわしい。

このように語りながら、オバマは事件の被害者たちと聴衆との間にアメリカ人としての連帯感を醸成しようとする。そして、その上で今回の銃撃事件をめぐる議論を事件によって失われた命に見合うものにしようと聴衆に呼びかける。オバマによれば、事件の被害者たちは、アメリカ人たちに対して、よりよい友人、隣人、同僚、両親となるよう呼びかけている。彼らの死は、より誠実で洗練された公的議論を求めている。そのような議論をとおして、アメリカ人たちは失われた命に恥じない形で、自分たちの国が直面する問題に取り組むことができるだろう。オバマは続ける。

We should be civil because we want to live up to the example of public servants like John Roll and Gabby Giffords, who knew first and foremost that we are all Americans, and that we can question each other's ideas without questioning each other's love of country and that our task, working together, is to constantly widen the circle of our concern so that we bequeath the American Dream to future generations.

（Obama, 2011, January 12）

オバマのこの言葉によって、今回の銃撃事件は自由と民主主義の徹底という国民的作業へと接続される。聴衆は事件の被害者たちと一体化し、「アメリカ人」という一つの塊が立ち上がる。彼らは自分たちの国に対する愛着を共

有しつつも自由に意見をぶつけ合い、よりよい市民社会の実現に向けての歴史的歩みを続けていく。アメリカ人たちが「良識と善良さにあふれている (full of decency and goodness)」ということ、そして「アメリカ人たちを分裂させようとする力は、彼らを結びつけようとする力ほど強くない (the forces that divide us are not as strong as those that unite us)」ということを自分は信じているとオバマは言う (Obama, 2011, January 12)。これらの言葉をとおして、オバマはアメリカ合衆国という共同体に対する聴衆の信頼を取り戻そうとしている。

3-6. クリスティーナ・テイラー・グリーン

オバマは銃撃によって命を落とした9歳の少女クリスティーナ・テイラー・グリーンについて回想することで、演説を締めくくる。クリスティーナはアメリカ合衆国の民主主義について関心を持ち始めたばかりだった。彼女は自分に与えられた市民としての義務について、そしてアメリカ合衆国の未来のために自分が成し得る貢献について、理解し始めたばかりだった。生徒会に加わるようになったクリスティーナは、公職に魅力を感じ、ガブリエル・ギフォーズに会いに行った。ギフォーズが自分の模範となってくれることを期待したからだ。彼女はすべてを子どもの眼差しで眺めていたとオバマは言う。それは、大人たちにとって当たり前となっている皮肉や辛辣さによって曇らされていない眼差しだった。オバマは続ける。

I want to live up to her expectations. I want our democracy to be as good as Christina imagined it. I want America to be as good as she imagined it. All of us — we should do everything we can to make sure this country lives up to our children's expectations.

(Obama, 2011, January 12)

ここでオバマは、アメリカ合衆国の民主主義をクリスティーナに代表される

子どもたちの視点から眺めることを聴衆に促す。そして、その純粋な眼差しが捉えた理想の民主主義の実現に向けて、最大限の努力をすることを彼らに求める。

クリスティーナは2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が発生した日に生まれた。この日に全米50州で生まれた子どもたちの中から各州それぞれ一人ずつを選び、その顔写真を収めた書籍『Faces of Hope: Babies Born on 9/11』の中に、クリスティーナの顔写真も収められている(Naman, 2002)。写真の横には、子どもたちに対する願いが記されている。それは「あなたが困っている人を助けますように」、「あなたが国歌の歌詞をすべて理解し、胸に手をあてながらそれを歌いますように」、そして「あなたが雨上がりの水たまりに飛び込みますように」といった言葉だった。このように紹介した後、オバマは以下のように述べる。

If there are rain puddles in Heaven, Christina is jumping in them today. And here on this Earth — here on this Earth, we place our hands over our hearts, and we commit ourselves as Americans to forging a country that is forever worthy of her gentle, happy spirit.

(Obama, 2011, January 12)

演説を締めくくるこの一節には、オバマがこの演説において語ってきた主題が凝縮されている。それはすなわち、クリスティーナに代表される銃撃事件の被害者たちの死を悼むこと、アメリカ合衆国という共同体に対する聴衆の信頼を取り戻すこと、そして自由と民主主義の徹底に向けて彼らの結束を促すことである。オバマはクリスティーナ・テイラー・グリーンという一人の少女の物語に託すことで、これらの主題を聴衆に強く印象づけようとしている。

4. オバマの語りの特徴

アリゾナ州トゥーソン銃乱射事件の追悼式典におけるオバマの演説には、以下のような特徴が確認できる。第一に、今回の事件を受けて行われた追悼演説は、「国民的ユーロジー (national eulogy)」の基本的特徴を備えていると言える (Campbell & Jamieson, 2008, pp. 73-103)。現職のアメリカ合衆国議会議員を標的として平穏な郊外で発生した銃乱射事件は、アメリカ社会に大きな衝撃を与えた。オバマは動揺するアメリカ人たちを前に、この衝撃的な出来事に意味を与えようとしている。オバマはこの演説において、死者たちを悼むと同時に、彼らの偉業を称えようとする。また、残された者たちの心の傷を癒すと同時に、彼らを一つの国民として結束させようとする。そして、自由と民主主義の徹底というアメリカ合衆国の理想の実現に向けて彼らを導こうとする。これらはいずれも国民的ユーロジーに期待された役割である。オバマは自分の言葉によって悲劇の中から希望を取り出し、アメリカ市民社会が落ち着きを取り戻すよう働きかける。そして、大統領としての自分に期待された責任を果たそうとする。

この追悼演説には、オバマの他の演説に共通する特徴も確認できる。その一つは、超党派性である。今回の銃撃事件においては民主党議員がその標的となったが、オバマはこれを民主党に対する挑戦ではなく、アメリカ合衆国の自由と民主主義に対する挑戦として受け止めた。このことは演説の随所に確認できる。たとえば、オバマは銃撃されたジョン・ロール判事について、彼が共和党の政治家ジョン・マケインによって連邦裁判所判事に推薦され、同じく共和党の大統領ジョージ・H・W・ブッシュによってこれに任命されたという事実言及している。また別の被害者フィリス・シュネックについて、彼女がギフォーズに親しみを抱いていた一方で、元々は共和党支持者であったという事実を紹介している。さらにオバマは、今回の事件が保守派とリベラル派の間の政治的対立を激化させつつある状況を踏まえて、互いの意

見に謙虚に耳を傾けること、そして共通の未来について語り合うことを聴衆に促している。これらのことから、オバマが党派の違いを越えたアメリカ人という一つの塊、そしてアメリカ合衆国という一つの共同体について語っていることがわかる。その意味において、この演説はアメリカ人たちに共通の体験や希望や未来について語るオバマの一連の演説と共鳴し合う。

また、2004年民主党全国大会基調演説や2008年大統領選中の一連の演説と同じく、オバマは今回の追悼演説においてもアメリカン・ドリームの世界を語っている（Rowland & Jones, 2007, 2011 参照）。このことをもっとも鮮やかに示すのは、死者たち一人一人の人生と生存者たちの英雄的行為を称賛する部分である。オバマは、今回の銃撃事件の犠牲者たちをアメリカ人たちが共有すべき遵法精神、勤勉さ、自己犠牲の精神、社会的公正への関心を体现する者たちとして描き出す。また、ガブリエル・ギフォーズに応急処置を施した研修生ダニエル・ヘルナンデス・ジュニアや、機に乗じて犯人の弾倉を取り上げたパトリシア・メイシュなどを身近な英雄として紹介する。そして、至近距離から頭部を銃撃されながらも一命を取り留め、快復の兆しを見せるギフォーズの姿にアメリカ人たちを特徴づけるとされる不屈の精神を重ね合わせる。オバマの語りによって、これらの人々はアメリカ人であることの最良の部分を体现する者たちとして聴衆に認識される。彼らの姿は、普通のアメリカ人たちには偉業を成し遂げる力が備わっていること、すなわちアメリカ合衆国にはアメリカン・ドリームの物語が息づいていることを示している。

これまでの議論が示すとおり、オバマはこの演説において特定のアメリカ人たちの物語を具体的に語り、それらの物語に自由、連帯、希望、民主主義の擁護といった主題を託している。これはオバマが個人名を挙げて紹介したすべての人物について当てはまるが、その中でも特に強い印象を残すのは、演説の最後で語られたクリスティーナ・テイラー・グリーンの世界である。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロの日生まれた「希望の子どもたち」の一人クリスティーナは、今回の銃撃によって命を落とした。しかし、

自由と民主主義に対する彼女の純粋な想いは、オバマの演説によって聴衆に共有され、新たな命を与えられた。クリスティーナの物語をとおして、聴衆はアメリカ合衆国という共同体に対する信頼を回復し、希望に満ちた未来を思い描く契機を得る。オバマは2008年の「ア・モア・パーフェクト・ユニオン」演説を、黒人有権者とともに共闘する道を選んだ23歳の白人女性アシュリー・バイア（Ashley Baia）の物語で締めくくっている。また、同じく2008年の大統領選勝利演説を、オバマに一票を投じた106歳の黒人女性アン・ニクソン・クーパー（Ann Nixon Cooper）の物語で結んでいる。これらの物語と同じく、今回の演説の最後を飾るクリスティーナ・テイラー・グリーン（Kristina Taylor Green）の物語も、オバマの演説の主題を強く聴衆に印象づける役割を担っていると言えるだろう。

5. おわりに

オバマの追悼演説は、多様なアメリカ人たちによって視聴され、彼らの多くに好意的に受け止められた。ピュー・リサーチ・センターによると、アメリカ人の75パーセントがオバマの追悼演説について少なくとも何かを耳にしたと答え、そのうちの69パーセントがこれを「素晴らしかった（excellent）」（36パーセント）あるいは「よかった（good）」（33パーセント）と評価していた。支持政党別にみると、民主党支持層の83パーセント、共和党支持層の56パーセント、無党派層の67パーセントが、オバマの演説を肯定的に評価していた（Arizona rampage, 2011, January 18）。

オバマの追悼演説に対する好意的な反応は、保守系政治家や言論人の言葉の中にも確認できる。たとえば、共和党所属の元アーカンソー州知事マイク・ハッカビー（Mike Huckabee）は、オバマの演説を「大統領就任以来、最良の演説」と評価した（Stein, 2011, January 14）。ジョン・マケインは、オバマが「左派であるか、右派であるか、メディア関係者であるかにかかわらず、政治的

議論に参加するすべてのアメリカ人たちに対して、お互いをもっと寛大に受け入れ、自分自身をもっと謙虚に認識するように促した」ことを高く評価した(McCain, 2011, January 16)。また、保守系雑誌『ナショナル・レビュー(National Review)』編集者のリッチ・ロウリー(Rich Lowry)は、オバマが「リベラル派の責任転嫁をさりげなく戒め、両派による罵り合いを乗り越えた」ことを評価し、今回の追悼演説は2004年民主党全国大会基調演説を彷彿とさせる」と述べた(Jackson, 2011, January 13)。

これらの反響から、オバマが今回の追悼演説において、聴衆の期待にかなりうまく応えているということがうかがえる。この演説は、死者たちを追悼し、生存者たちを励まし、アメリカ合衆国の民主主義を危機から救うという目的を達成しているように見える。オバマが今回の演説において、頻発する銃犯罪への対応を具体的に語っていないことを疑問視する声も聞かれたが、もしオバマが今回の演説に銃規制を推進するような表現を盛り込んでいたとしたら、この演説の超党派的魅力は失われていたかもしれない。また、追悼演説の主な目的は死者を追悼することにあり、自らの政策的立場を主張することにはないため、銃規制改革に向けて聴衆を説得するという作業は、別の演説において追及されるべき課題だとも言える³⁾。

註

- 1) 英語の「eulogy」には「頌徳演説」などの日本語訳もあるが、これでは元の言葉が併せ持つ「称賛」と「追悼」という二重の意味が伝わりにくいため、本稿ではカタカナで「ユーロジー」と表記することとした。
- 2) この「a more perfect union」という言葉は、アメリカ合衆国憲法前文の冒頭で使われている。また、オバマの2008年の演説「ア・モア・パーフェクト・ユニオン(A More Perfect Union)」においても、この言葉が中心的に使われている。英語の「union」という言葉には、統合、結合、結束、団結、連帯、連合、連盟、連邦、統一国家としてのアメリカ合衆国など多様な意味があるが、

ここでは文脈を踏まえて「連邦」とした。

- 3) オバマが銃規制改革について直接的に語るの、2012年12月にコネティカット州の小学校で銃乱射事件が発生し、20人の幼い子どもたちと6人の教職員が命を落とした後のことである。その際のオバマの力強い呼びかけにもかかわらず、銃規制改革は実現しなかった（花木、2015）。

引用文献

- 花木亨（2015）『大統領の演説と現代アメリカ社会』大学教育出版。
- Arizona rampage dominates public's news interest. (2011, January 18). Pew Research Center. Retrieved from <http://www.people-press.org/2011/01/18/arizona-rampage-dominates-publics-news-interest/>
- Ball, M. (2011, January 8). Gabrielle Giffords: Driven but gracious, known as rising star. *Politico*. Retrieved from <http://www.politico.com/news/stories/0111/47254.html>
- Balz, D. (2011, January 10). Palin caught in crosshairs map controversy after Tucson shootings. *The Washington Post*. Retrieved from <http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2011/01/10/AR2011011006653.html>
- Campbell, K. K., & Jamieson, K. H. (2008). *Presidents creating the presidency: Deeds done in words*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Cooper, H., & Zeleny, J. (2011, January 12). Obama calls for a new era of civility in U.S. politics. *The New York Times*. Retrieved from http://www.nytimes.com/2011/01/13/us/13obama.html?pagewanted=all&_r=0
- Frank, D. A. (2009). The prophetic voice and the face of the other in Barack Obama's "A More Perfect Union" Address, March 18, 2008. *Rhetoric & Public Affairs*, 12, 167-194.
- Frank, D. A. (2011). Obama's rhetorical signature: Cosmopolitan civil religion in the Presidential Inaugural Address, January 20, 2009. *Rhetoric & Public Affairs*, 14, 605-630.
- Frank, D. A., & McPhail, M. L. (2005). Barack Obama's address to the 2004 Democratic National Convention: Trauma, compromise, consilience, and the (im)possibility of racial reconciliation. *Rhetoric & Public Affairs*, 8, 571-594.
- Jackson, D. (2011, January 13). Obama's speech likely bound for history books. *USA Today*. Retrieved from <http://content.usatoday.com/communities/theoval/post/2011/01/obamas-speech-likely-bound-for-history-books/1#.VBN4d9VRZjo>

- Lacey, M., & Herszenhorn, D. M. (2011, January 8). In attack's wake, political repercussions. *The New York Times*. Retrieved from http://www.nytimes.com/2011/01/09/us/politics/09giffords.html?pagewanted=all&_r=0
- McCain, J. (2011, January 16). Mr. Obama's admirable speech. *The Washington Post*. Retrieved from <http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2011/01/14/AR2011011406770.html>
- Murray, S., & Horwitz, S. (2011, January 9). Rep. Gabrielle Giffords shot in Tucson rampage; federal judge killed. *The Washington Post*. Retrieved from <http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2011/01/08/AR2011010802422.html>
- Naman, C. P. (2002). *Faces of hope: Babies born on 9/11*. Deerfield Beach, FL: Health Communications.
- Obama, B. (2011, January 12). *Remarks by the President at a memorial service for the victims of the shooting in Tucson, Arizona*. Tucson, Arizona.
- Police 'actively pursuing' second person in Tucson shooting. (2011, January 9). *CNN*. Retrieved from <http://www.cnn.com/2011/CRIME/01/08/arizona.shooting/>
- Rowland, R. C. (2011). Barack Obama and the revitalization of public reason. *Rhetoric & Public Affairs*, 14, 693–726.
- Rowland, R. C., & Jones, J. M. (2007). Recasting the American dream and American politics: Barack Obama's keynote address to the 2004 Democratic National Convention. *Quarterly Journal of Speech*, 93, 425–448.
- Rowland, R. C., & Jones, J. M. (2011). One dream: Barack Obama, race, and the American dream. *Rhetoric & Public Affairs*, 14, 125–154.
- Stein, S. (2011, January 14). Huckabee praises Obama for “easily his best speech,” slams “sleazy opportunists.” *The Huffington Post*. Retrieved from http://www.huffingtonpost.com/2011/01/14/huckabee-praises-obama-fo_n_809141.html
- Terrill, R. E. (2009). Unity and duality in Barack Obama's “A More Perfect Union.” *Quarterly Journal of Speech*, 95, 363–386.
- The First Amendment to the United States Constitution (1791).